

中国・遼寧省におけるいわゆる遼塔の 第一層塔身浮彫尊像に関する調査報告

水野 さや

1. はじめに

10世紀初めに耶律阿保機が興した契丹（後に遼）は、現在の中国吉林省、遼寧省、北京市、河北省北部、山西省北部、内蒙古自治区にまたがる領土を支配した契丹族の王朝であった。遼は騎馬遊牧民族としての民族固有の宗教的伝統とともに、聖宗（在位982～1031年）、興宗（在位1031～1055年）、道宗（在位1055～1101年）の時代を中心に、1125年に金に滅ぼされるまで仏教が盛んに信仰され、多くの寺塔が建立された。その様は決して宋（北宋）や高麗に劣るものではないことは、現存する数多くの仏塔からもうかがえる。

いわゆる遼塔¹と称されるこの仏塔の主な特徴は、八角十三層の塔が多く、塔身の二層目以上に内部空間はなく、二層目以上の屋根の軒の間隔が詰まった密檐式であることが挙げられている²。そして何よりも、第一層塔身部が多数の浮彫尊像により荘厳されていることが特徴である。

2010年夏、筆者は遼寧省における仏教遺蹟調査の機会を得た³。ただし、今回の調査においては瀋陽、遼陽、朝陽、阜新、義県、北鎮に限られ、しかも修理作業中であったり、交通が極めて困難であったりする仏蹟には赴くことが出来なかった。このような限定的な状況ではあるが、いわゆる遼塔の第一層塔身の浮彫尊像の実地調査を行うことができた。筆者は、これまで統一新羅時代から高麗時代の石塔の浮彫尊像について取り上げ、論考をまとめてきたが、韓国における石塔全体の割合からみれば、浮彫尊像を表面に伴う石塔は決して多数派ではなく、大半が文様を施さないものである。ないしは、建築部材（窓枠や門扉、軒や瓦の表現）を浮彫であらわす、また

は雲や花などの装飾文様を施すにとどまる。しかし、このように特殊であるからこそ、塔の表面にあらわされた浮彫尊像を見ることにより、当時の仏塔に対する信仰のあり方を知ることが出来るのではないかと考えている。

本稿は、このような観点から、いわゆる遼塔の塔身第一層にあらわされる浮彫尊像について、まずは現状を報告することが目的である。いわゆる遼塔は当時の城址の四隅ないし近郊の丘陵に建立されることが多いことから、『仏頂尊勝陀羅尼経』に説かれる陀羅尼の効果的な安置法がその立地に影響を与えていることにも触れたい。また、浮彫尊像の造形的特徴を手がかりに、11世紀中頃から12世紀前半までの流れを追い、造形表現の変化を考察したい。なお、浮彫尊像そこからうかがえる問題点については指摘するとどめ、個別に稿をあらため考察する予定である。

2. 第一層塔身浮彫尊像の現状と概要

〔表〕は、今回実地調査におよぶことができた塔のなかから、第一層塔身部に浮彫尊像をあらわす塔を取り上げ、明らかに近世・現代の後補部分を除き、その手印や持物などの特徴を中心にまとめたものである。なお、石仏寺塔（瀋陽市瀋北新区朝鮮族錫伯族郷）⁴は極めて最近の補修を受け（現在も作業中）、浮彫像は明らかに最近の補作であるため、永豊寺塔（瓦房店市復州城鎮、図13）⁵も近年の修理により当初の浮彫像が失われてしまったため、調査は行ったものの表中に含めなかった。また、朝陽南塔は現状において浮彫尊像をあらわさないため、無垢浄光舍利塔（瀋陽市）および遼濱塔（新民市公主屯鎮）⁶

については、第一層塔身の浮彫尊像において当初の彫刻面を認めるには困難な点が多いため、表中には記載したが本文では取り上げない。

なお、表中には塔の建立年代を明記していない。ここにはたとえ題記があったとしても信用しがたい年代判定の難しさがある。遼代の創建であっても、後の金・元・明・清の修理において、古い部分の上に被せるような補修が行われることが多くあり、破損した彫刻は埴を取り替えないし漆喰で塗り固めるなどの処置を行い、新たなものとしてしまうこともままあるからである⁷。

① 朝陽北塔（図1-1～8）

朝陽北塔は、1980年代に行われた発掘調査により、北魏時代の木塔を始まりとし、隋および唐代に重修され、特に唐代に埴塔として重修された塔を遼代に引き継ぎ、10世紀および11世紀中頃の二次にわたる遼代の重修がなされたことが明らかにされている。そして、天宮および地宮から発見された仏頂尊勝陀羅尼経幢をはじめとする多くの埋納品は、重熙十一年（1042）から同十三年（1044）の重修時に重葬されたものである⁸。さらに、地宮の石函外側の石板および天宮の「令聊記石匣内」題記に「大契丹重熙十二年四月八日午時再葬像法更有八年入末法故置斯記」⁹とあり、今は像法にあり、来るべき末法（1052年）に備えてその八年前に安置したものであることが知られる。

また、朝陽には北塔とともに南塔があるが、かつては東塔も聳え立っていた。この東塔は清代に倒壊し、現在は関帝廟になっている¹⁰。

朝陽北塔は方形十三層の埴塔で、第一層塔身の四面に鳥獣座に坐す如来坐像を中心に、左右に供養菩薩像と方形十三層塔をそれぞれ配する。東面の二基の塔内には涅槃仏と維摩居士を、他にはいずれも如来坐像をあらわす。左右の宝塔にはそれぞれ位牌形の区画に宝塔名が記されている。各面とも中尊如来坐像と左右の宝塔の上にそれぞれ天蓋がかかげられ、いずれの天蓋の左右にも降下する飛天があらわされる。なお、朝陽北塔の東・西・南・北の四面におい

て、損壊の著しい北面は不明なところもあるが、西面と東・南面とは明らかに表現が異なっているところがある。この点を中心に、西面の如来坐像について確認しておきたい。

西面の中尊如来坐像は、五羽の孔雀を伴う蓮華座上に右足を上にして結跏趺坐し、両手は腹前において第一・二指を捻じて定印（弥陀定印）を結ぶ。西面如来像は二重の頭光、二重の身光を付け、さらにその外側に仏身全体を覆う二重の円光をもつ。他の面においては全体の円光のみである。なお、朝陽北塔から出土した金銀製経塔（重熙十二年〔1043〕）¹¹にあらわされる宝冠を戴く大日如来坐像（図14-1、2）においても、頭光、身光を付け、さらにその外側、仏身全体に円光があらわされる。また、蓮華座は、両膝の外側のところで俯瞰的な表現がなされ、蓮肉と蓮弁を斜め上から見たようにあらわされている。この表現は東面・北面にも認められる。頭上の天蓋については、西面においては垂飾下端の蓮華が天蓋の底面に彫りあらわされているが、他面では平坦に整えられるのみで、底面にまで彫刻がおよんでいない。脇侍像の天蓋に目を向けると、西面においては、天蓋の頂部に付けられた宝珠形飾りは、宝珠の受座、蓮華座、反花など、構成がしっかりしており、対して、東面などにおいては、単に二弁の間に宝珠が載るにとどまっている。垂飾の構成は同じであるが、中央下端の斜め下方から見上げたような蓮華の表現は、同じようにあらわされているけれども、花卉が小ぶりな西面の蓮華に対し、東面や南面などでは大ぶりな蓮華になっている。先の金銀製経塔の大日如来坐像においても、天蓋は斜め下から仰ぎ見たようにあらわされ、両脚部と蓮華座・八角形の框は斜め上から見下ろしたように表現する。

面部においては、まず、こめかみでのくぼみや頬の隆起などをほとんど考慮せず、やや下ぶくれの感があるすっきりとした輪郭であらわされ、その輪郭にそってエッジに面取りが行われている。眉は、眉根から左右に円弧を描き、上瞼との間にくくり線をあらわす。また、下瞼の下にも、目頭から目尻にかけてくくり線をあらわす。鼻根から鼻先にかけて細

く伸びる鼻は、鼻翼の膨らみをあまり強調しない。鼻翼の幅ほどの小さな口は固く結ばれ、肉厚な上・下唇は輪郭が強く波打つ。破損が著しい北面を除き、南面や東面においては、頬のエッジの処理など、十分に考慮されていないところがある。

頭部においては、西面の如来像は細かな毛筋を施し、まばらにまとめた髪の上に宝冠を戴くが、宝冠の精緻な文様もさることながら、中央の五つの円形区画にはそれぞれ中に五仏が線刻されている。表面の破損が著しい北面を除き、南面・東面の如来像については円形区画が平らに整えられるのみで、五仏を彫りあらわさない。

体部においては、西面如来坐像は大衣の表地（七宝繫ぎ）および縁（単弁の四弁花文を繫ぐ）、內衣の表地（七宝繫ぎの中に四弁花文）および縁（斜め格子文を地として三陵形の四弁花文を繫ぐ）にそれぞれ文様をあらわすが、これも同じ塔であっても南面、東面、北面にはみられない表現である。また、西面如来坐像は腹前において左右ともに第一・二指を捻じて定印を結ぶ（いわゆる弥陀定印を結ぶ）が、それぞれ内側に曲げられた第三・四指が表現されており、同じ図像を採りながらも後述の鳳凰山雲接寺塔、大宝寺塔、青峰塔の西面像には見出せない細かな点である。朝陽北塔西面の細く長い指は、それほど指の節を強調してはいないが、南面の如来坐像においては、与願印を結ぶ左手など、指の分節が明確である。その他、体部を覆う衣文線はけっして彫りが深くはなく、搔き落としによる彫りや垂直に鑿を当てた彫りを駆使しながら、息の長い流麗な衣文線がつからなる。対して、東面や南面においては、搔き落としの彫りを用いながらも彫りの質が単調で、むしろ堅実で力強い印象がある。

以上のように、朝陽北塔西面の如来坐像は他面と明らかな相違がある。西面の如来坐像に見られる表現が朝陽北塔出土の金銀製経塔（1043年）の如来像と共通するため、11世紀中頃の浮彫像と一応定めておくことが出来るであろう。対して、他面の如来坐像は西面像を意識して造られた感がある。したがって、11世紀後半以降、何らかの理由により手が

加えられたものと推測したい。北塔の周囲からは金・元代の遺物が出土し、この時期に基壇部の修築が行われており¹²、また、朝陽南塔からも2000年の修理時に金の正隆年間（1156～1160）の年記を伴う題記が出土していることから¹³、南面や東面の浮彫は、西面にならい、この頃に補修されたものと推測したい。

② 雲接寺塔（図2-1～5）

朝陽市の東側に聳える鳳凰山の山中に建つ方形十三層塔である。基壇には南面に門を設け、他の三面は門扉を彫出する。基壇部にあらわされた法輪や金剛杵などは、後述の青峰塔にも見られる。第一層塔身部には、中央に龕を設けずに如来坐像を、左右に菩薩立像と方形十三層塔を一基ずつそれぞれ蓮華座上に配する。位牌形の区画に宝塔名を記す。如来坐像の上方と左右の宝塔の上にそれぞれ天蓋をあらわし、如来坐像の天蓋の左右には飛天を各1躯配する。四面の如来坐像の構成、印相および鳥獣座は、いずれも朝陽北塔の四面に準じている。しかし、表現において違いがあり、象、孔雀、金翅鳥ともに頭部を浮き出させ、より立体的になっている。また、朝陽北塔においては蹲踞して華盤や香炉を捧げ持つ供養菩薩像を如来像の左右に配するが、本塔においては合掌するないし蓮華などの持物を執る菩薩立像となっており、これは以下の塔と同じである。

塔身第一層に関しては、各面とも後世の補修が著しく、古い表面はほぼ認められない。雲接寺塔は1963年に遼寧省文物保護単位に指定されているが、さらに2006年に全国重点文物保護単位に指定されるにおよび、新たに加えられた修理であると推測される¹⁴。

③ 大宝塔（図3-1～6）

鳳凰山の北側の山頂付近に位置する方形十三層塔である¹⁵。塔身第一層に対し第二層目より上の幅が急に狭くなり、現状において必ずしも創建当初のプロポーションを維持しているとは認め難い。塔身第一層の一面の縦横の比率も、朝陽北塔、朝陽南塔、

雲接寺塔に比べて正方形に近くなっている。高さに対して横幅が狭くなっていく傾向がうかがえる。基壇の南面に入口を設け、現状において、南側はコンクリートの斜面で補強されている。

第一層塔身部の浮彫尊像は、表面には全体的に手がかけられているようであるが、図像そのものはある程度信用できると思われる。四面にそれぞれ蓮華座上に坐す如来坐像を龕を設けずにあらわし、その左右に方形十三層塔を一基ずつ配する。如来坐像の上方に天蓋と、その左右に飛天、左右の宝塔の上方にも天蓋をそれぞれあらわす。如来坐像の図像は朝陽北塔に準ずるが、脇時菩薩像と宝塔名を伴わず、宝塔の中に仏坐像ではなく門扉があらわされている。

如来像は頭部に奥行きがあり、頭部から胸前にかけて緩やかな膨らみが続き、下半身に行くほど平坦になる。鳥獣座の馬・象・孔雀・金翅鳥はほぼ線刻であらわされている。朝陽北塔の尊像との造形的な違いは、浮彫の奥行きが増した点である。

④ 青峰塔 (図4-1~7)

遼代の德州城址の西側に位置する西塔山の山頂に建つ方形十三層塔である。基壇部は南面にのみ龕を設け、その左右に金剛力士像を配する。右側の力士像は右手に金剛杵を執る。また、基壇の各面に設けられた象眼には、頭部と前脚を浮き出させた獅子像があらわされている。これは後述の義県広勝寺塔(嘉福寺塔)にも見られる要素であるが、広勝寺塔に比べると獅子の表現はおとなしい。広勝寺塔の建立は遼末金初とされることから、本塔はそれよりは先行すると思われるが、朝陽北塔と浮彫像の構成は共通しても、そこまでは遡らない時期に建立されたものとみられる。

なお、塔の周辺から石造獅子像が出土しており、頭部が小振りで前脚がすらりとして長く、現在の基壇部に浮彫された獅子像とは異なる。特に、広勝寺塔基壇部の獅子に見られる、前脚を踏ん張る力強くダイナミックな造形とは、感覚を異にするものである。当初は、この石造獅子が塔の周囲に置かれてい

た可能性もある。

第一層塔身部には、四面の中央に龕を設けずに如来坐像をあらわし、その左右に菩薩像と方形九層塔を各1配する。左右の宝塔の第一層塔身に仏坐像などはあらわさず、方形の龕をくぼめるのみである。如来坐像と菩薩坐像の上方には天蓋をあらわし、飛天を左右に配する。四面の如来坐像の手印および鳥獣座は朝陽北塔と同様であるが、ここでは南面のみ宝冠如来形とし、他面は通常の如来形である点は異なっている。このような南面のみ宝冠如来像とする点は、後述する八角十三層塔などに多く見られる要素である。

如来坐像および菩薩立像は、頭・体ともに奥行きが増している。菩薩立像については頭部から足先まで側面観においては均一な張り出しを見せ、如来坐像においてはほぼ丸彫に近い像となる。浮彫の奥行きに深さに合わせて、青峰塔や八棱観塔のように、顔の輪郭がやや下膨れの感のある穏やかな卵形から、十分な頬の丸みを有する顔立ちがあらわれる。またここでは頭部の突出に合わせて、天蓋も大きく浮き出させるが、朝陽北塔西面に見られたような斜め下から仰ぎ見る視点はなく、天蓋底面にも配慮がなされていない。ただし、本塔および次の八棱観塔においては如来像を龕内に安置することはせず、壁面から直接彫出している。

⑤ 八棱観塔 (図5-1~6)

遼の太祖が建設した建州城址の西側に位置する丘陵に建つ八角の塔で、現状においては十二層となっているが、当初は十三層であったと思われる¹⁶。基壇部は特に下部表面において全体的に最近の修理を受けているようであるが¹⁷、基壇上部の蓮弁以上、塔身部などは、比較的古い彫刻面が残されている。第一層塔身部は、縦に対し横幅が広く、横長の区画になっており、朝陽北塔などからの連続性を感じさせる。後述の広勝寺塔(嘉福寺塔)、崇興寺塔などは、第一層塔身部が縦長の区画になっている。また、各面を帯状の界線により上・下に区分している点は、遼陽白塔に共通する。龕を設けずに中

央の尊像を浮彫する点は、朝陽北塔、大宝塔、黄花灘塔、東平房塔など、朝陽周辺の磚塔に認められる。

各面は、帯状の界線の上下をまたいで、中央に尊像があらわされている。いずれも円形の頭光を付け、八角形框（前半のみあらわす）を伴う蓮華座上に坐る。左右上部の塔は十三層で、第一層塔身に化仏をあらわし、塔頂に蓮蕾型の飾りが付く。下段には、尊像の左右に供養者立像を各1軀、上段には、尊像の上方に天蓋、その左右に飛天を各1軀あらわし、像の頭部の左右に雲があり、その上に宝塔が各一基あらわされる。天蓋は頭頂に覆い被さるほど浮き出しており、蓮華座も奥行きがある。そのため、坐像の両脚部も奥行きが深く、それぞれの持物も厚みをもって立体的に表現されている。天蓋を浮き出させる点は青峰塔に共通するが、青峰塔においては尊像の頭部を中心に奥行きが増していたが、八稜観塔の尊像は両脚部にもしっかりと奥行きをもつ。ほぼ丸彫りに近い状態の尊像が、塔身部の表面に貼り付けられている状態である。

尊像は、剥落が著しい西南面および西面、北面を除き、胸甲や肩甲、甲締め紐が認められ、いずれも着甲像とみられる。また、花文や靈芝状の雲文を多用した豪華な宝冠を戴く像もある。現状において認められる宝蓋や金剛杵などの持物は、八大菩薩を構成する菩薩像の持物に共通するものである。

⑥ 黄花灘塔（図6-1~4）

遼代の建州城址の北側に位置する丘陵に建つ八角十三層磚塔である。第一層塔身には南面にのみ龕を設け、龕内奥壁に仏坐像が描かれている。龕の上部に華盤を、その左右に飛天をあらわす。全面的に補修がされており、この華盤は本来は天蓋であったと思われる。龕内側壁に清の康熙五年（1666）の重修銘があり、この壁画は清代のものと思われ、塔の表面の浮彫も大半がこの頃の重修によるものと思われる。基壇部および塔身部において遼代に遡る彫刻面を認めることは困難である¹⁸。

南面を除く七方には、円形頭光を付け、蓮華座上

に如来立像をあらわす。その上方に天蓋があらわされ、如来像の頭部の左ないし右側に位牌形ないし縦長の浅い龕状の区画を設け、人名らしき銘が認められる¹⁹。

なお、錦州市博物館に所蔵される遼代の如来立像は、方形台座上の踏割蓮華上に、頭体ともに正面を向いてやや足を開いて直立する。肉髻はあまり高くあらわさない。胸前に內衣の襟をあらわし、通肩式に袈裟をまとい、右肩に袈裟の一端が懸かる。腹前から膝にかけての大衣の衣文は左から右に一方に円弧を描いてあらわされ、膝下の裾には垂直の衣文をあらわす。全体的に細身の造形である。この如来立像と比較すると、黄花灘塔の現状の如来立像には遼代の彫刻面が残っているとは思われず、清代の重修時に大々的に手が入られたものといえよう。しかし、天蓋を浮き出させてあらわす点は、青峰塔および八稜観塔と共通し、表面に補修は受けているものの、これについては当初の彫刻を残していると思われる。

⑦ 塔營子塔（図7-1~4）

遼代の懿州城址の城内西側に位置する八角十三層磚塔である。2010年9月2日の調査時において塔の修理作業が行われており、修理用の足場が組まれ、全体的な確認は不可能であった。

第一層塔身部は、各面の中程から下方にかけて龕を設け、その中に蓮華座上に坐す如来坐像を浮彫する。龕の左右に菩薩立像（北面のみ金剛力士像とする）をあらわし、それぞれに対応する天蓋を上部に設ける。如来坐像の天蓋の左右に飛天をあらわす。菩薩像の上部の天蓋は、蓮華を下方から仰ぎ見たような表現がとられている。浮彫は浅いが、彫刻の底面に対する意識がうかがえる。如来坐像、菩薩立像は、頭・体ともに一定の厚みをもってあらわされる。特に面部に丸みが増すが、体軀はそれに追いつかず、上半身から下半身まで、平坦な隆起が表面を覆うものである。

なお、壁面に仏像のみ直接あらわすものは、仏龕のある構図から、龕その他をのぞき去った簡略化と

の解釈もかつてあったが²⁰、朝陽北塔西面を基準に考え、遼末から金代の建立とみられる義県広勝寺塔、遼陽白塔、錦州市広濟寺塔への流れを見るならば、浅い浮彫像から次第に浮彫の厚みが増し、頭部中心から頭・体が均一に浮き出るに至り、さらに像の奥行きをもたせるために、龕を設けてその中にほぼ丸彫りに近い像を安置するに至ったと考えられよう。

⑧ 広勝寺塔（図8-1~5）

現在、広勝寺の境内に建つ八角十三層塔である²¹。2010年9月7日の調査時においては修理中であり、八面とも十分な調査を行うことができなかった。なお、今日、広勝寺の境内には近年の真新しい白衣観音立像が安置されているが、蓮華座は遼代に遡り、直線的でありながら先端に反りがある蓮弁である。これは塔の塔身下部の蓮弁とは明らかに表現が異なっており、現状における塔の表面が金代以降の手を受けていることは明らかである。義県奉国寺の境内に安置されている広勝寺伝来の経幢には、『仏頂尊勝陀羅尼経』とともに経幢造立の年記がある。それによれば、本経幢の造立は遼末の天祚帝の乾統七年（1107）、塔の建立は天恵十年（1120）とあり、塔の完成は金初（1125～30年頃）とみられる。

基壇の八面に設けられた象眼に獅子をあらわす。頭部を欠くものが多いが、象眼から踏み出さんばかりにあらわされた前脚は力強い。朝陽県の青峰塔にも見られた要素であるが、広勝寺塔の年代から、基壇にこのように大きく獅子をあらわすのは、朝陽北塔の重修期（11世紀中頃）までは遡らず、遼末から金代にかけての基壇部の特徴と思われる。

第一層塔身部には、中央に龕を設け、円形頭光を付け、蓮華座上に坐す如来坐像をその龕内にあらわす。龕の左右に菩薩立像を配するが、浅い龕状の区画内に浮彫される。これは次の崇興寺東塔においても見られる要素であるが、朝陽および阜新の塔にはない特徴であった。三尊の龕の上には天蓋をあらわし、如来坐像の天蓋の左右に飛天を配する。また、上部中央に蓮華をあらわすが、この中央に鏡が埋められていたと推測されている。塔の塔身部に鏡を填

める塔が多数あるが、北鎮市崇興寺双塔、遼陽白塔、錦州市広濟寺塔などは遼代末から金代にかけての建立とみられ、崇興寺東塔、朝陽市雲接寺塔は後の補修が著しい塔である。

如来坐像は、東・西・南・北の如来像のみ蓮華座を獅子が支える。これは今回調査におよぶことができた塔においては広勝寺塔のみであったが、東・西・南・北の四面の如来像を特別視する意図がうかがえる。朝陽県双塔寺双塔のうちの東塔においても、南面に龕を開け、北面に門扉、東・西面に窓枠を浮彫し、他の四面に如来坐像を浮彫することから、八角形多層の塔の第一層塔身部の浮彫尊像が、朝陽北塔のように四面に如来坐像を配する塔から展開した可能性をうかがわせる。

頭部は丸く体部にかけて均一の奥行きをもつ浮彫像である。龕の深さは広濟寺塔、遼陽白塔ほど深くはないが、阜新市塔営子塔よりは奥行きが増している。菩薩像は、顎が左右にはり、やや角張った顔立ちを見せている。上半身の比重が大きく、下半身はやや心もとない感があり、衣文線は流麗さより力強さが勝っている。

⑨ 崇興寺双塔（図9-1~6）

崇興寺は遼代の宜州城址に位置し、金堂前に東・西二基の八角十三層塔が建つ。今回調査におよぶことが出来た塔において、双塔形式の伽藍を持つ寺院はこの崇興寺のみであった。東塔・西塔ともに基壇部は後の補修が著しく、塔身部においても、2010年9月8日の調査時において西塔は全面的に修理中であり、東塔はすでに大々的な修理を受けた後であった。なお、塔の下部の石造八角地台石は、装飾文様から明代のものと思われる。

東塔の第一層塔身部は、中央に龕を設け、蓮華座上に如来坐像をあらわす。その左右に菩薩立像を配するが、広勝寺塔のように、浅い龕状の区画内に浮彫される。それぞれの上に天蓋をあらわし、如来坐像の天蓋の左右に飛天を各1躯配する。如来坐像はすべて宝冠如来形であるが、いずれも後世に補修されたものである。菩薩立像の表面も、当初の彫刻面

は認められないが、輪郭線には当初の部分も残っていると思われる。上半身に比べて下半身が細い感がある。

西塔の第一層塔身部も同様の構成であるが、菩薩立像の周囲に龕状の浅いくぼみは設けない。如来坐像は、南面のみを宝冠如来形とする点は東塔および広勝寺塔とは異なり、錦州市広済寺塔や朝陽県青峰塔に認められる。菩薩像は、顎が左右に張り、やや角張った顔立ちを見せている。上半身の比重が大きく、太造りの堂々とした体躯であり、衣文線は単純で力強い。このような東・西塔の尊像の表現の差は建立年代のずれに起因する可能性もある。

⑩ 広済寺塔 (図10-1~8)

広済寺の境内に建つ八角十三層塔である。錦州市博物館には広済寺塔に吊されていた鉄製風鐸の他、遼代に遡る塔の部材があり、遼代の創建とされるが、明・清にかけての重修に加え、近年においては2003年にも修理を受けている。

第一層塔身の各面は、帯状の界線により上・下に分けられ、下段には、中央に龕を設け、火炎光背を伴い、蓮華座上に如来坐像を安置する。その左右に、踏割蓮華座の上に菩薩立像を浮彫し、各菩薩像の上に天蓋をあらわす。上段には、仏龕の上方に天蓋を、その上方左右に飛天を各1軀あらわす。

如来坐像は、南面のみ宝冠如来形とし、智拳印を結ぶ。他面の如来坐像は宝冠は戴かず、通肩式に大衣をまとう。如来坐像は顎が細く肩の張りが強く、頬が丸く、頭部の鉢が張り、肉髻は平坦である。その相好は遼代の如来像とも金代のものとも異なる特徴であることから、現在の龕内に安置される如来坐像は、いずれも後世の重修時のものと思われる。

菩薩立像は、近年補修された像もあるが、当初の彫刻面を残す像もあり、顎が左右に張った角張った顔立ちで、なで肩でやや太造りのプロポーションを見せ、しなやかさを欠いている。奥行きはあるが全体的に抑揚の少ない平坦な浮き出しとなっている。また、菩薩像に確認できる持物は、蓮華、金剛杵、数珠(ないし索)、水瓶などである。

⑪ 遼陽白塔 (図11-1~6)

遼東城址の西北に位置し、現在は白塔公園内に建つ八角十三層塔である。北側には明代に建立された広祐寺がある。1922年、大定二十九年(1189)の年記を持つ石碑「東京大清安禅寺九代祖英公禅師□□并序」(□は欠字)²²が発見されており、金の貞懿太后が英公禅師の没後に建てた清安禅寺と、同じく貞懿太后が創建した垂慶尼寺がともに白塔付近一帯の寺地を占めていたと推測されることから、この石碑は現存の白塔に関係するものと推測されてきた²³。近年の調査において、塔頂から明の永樂二十一年(1423)の「重修遼陽城西広祐寺宝塔記」などの銅碑計5枚が発見された。これに引用されている元の皇慶二年(1313)の重修記によれば、本塔は遼代には創建されていたようであり、金・元に重修を受け、さらに明代に修理された経緯が知られる。明の隆慶五年(1571)の年記を伴う鉄製風鐸も出土しており、明代の修理は複数年におよぶ大がかりなもので、さらに近年、1990年に基壇部を中心に修理がなされている。

第一層塔の各面は、帯状の界線によって上・下に分けられる。下段の中央に龕を設け、蓮華座上に如来坐像(いずれも後補像)を安置する。龕の左右にそれぞれ踏割蓮華座の上に菩薩立像を浮彫し、各菩薩立像の上に天蓋をあらわす。上段では、仏龕の上方に如来坐像の天蓋をあらわし、その上方左右に飛天を配する。龕内の如来坐像は完全に後補像に変わっているが、別材製の火炎光背は錦州市広済寺塔の如来像のものと共通し、明代の重修時のものと推測される。菩薩立像は、頭部は高く浮き出るが体部の奥行きは平坦な傾向がある。両手先と持物を含め、頭部と足下の踏割蓮華座と同じ高さに均一に浮き出させるため、特に上半身は平坦である。なで肩でやや太造りのプロポーションを見せ、固く力強いしっかりとした彫りである。また、菩薩像に確認できる持物および印相は、蓮華(開蓮華・未敷蓮華)、華盤、壺形の持物を執り、胸前で合掌手とするものもある。

⑫ 東平房塔（図12-1~3）

遼代の建州城址の東側に位置する丘陵に建つ六角九層磚塔である²⁴。塔の周辺には遼代、明代、清末頃の異なる時代の磚が散在しており、この塔の創建は遼代に遡るとしても、その後、明代と清代の重修を受けていたことが知られる。2010年9月5日の調査時においても修理中であり²⁵、全体的な確認は困難であった。基壇部には法輪や金剛杵があらわされ、鳳凰山雲接寺塔と共通する。基壇部は清代に全面的に補修されたものと思われる。

第一層塔身部は、中央に門扉、その左右に岩座上に立つ金剛力士像をあらわす北面、中央に龕を設け、その左右に踏割蓮華座上に菩薩立像をあらわす南面を除き、他の四面はいずれも中央に龕を設けずに如来坐像をあらわし、左右に菩薩立像、如来像の上方に天蓋、その左右に飛天を配する。如来坐像は円形の頭光と身光を付け、蓮華座上に坐る。天蓋は平坦ながら、如来坐像、菩薩立像は頭部から体部にかけて全体的になだらかに浮き出ている。衣文線など、全体的にぎこちなく直線的な彫りが見られる。

また、六角形のうち、金剛界四仏を左右の四面にあらわしたもので、朝陽北塔と同様、金剛界曼荼羅を表出したという見解もある²⁶。しかし、弥陀定印を結ぶとみられている西北面の如来像は緊縛した拳を腹前に置くものであり、塔営子塔においては東南面の如来像にみられる印相である。したがって、必ずしも本像を阿弥陀如来とみることは出来ないであろう。

なお、龕の内壁左右に神将像が描かれており、そこに「正隆二年四月十二日」の年記が認められたようであるが²⁷、今回の調査においては確認できなかった。正隆二年（1157）は金の年号であり、本塔が金代に建立されたものであることをうかがわせる。本塔の如来像・菩薩像に見られる肩の張ったプロポーション、衣文線の直線的で力強い様子、如来像の大粒の螺髪など、金代の浮彫像の特徴と認めてよいであろう。

3. いわゆる遼塔の立地について

以上のように、崩落および修理作業中により頂部が確認できない塔もあるが、現存する塔は八角形のプランを持つ磚塔が多く、八角十三層磚塔が大多数である。一方、朝陽地域では朝陽北塔、朝陽南塔、雲接寺塔（朝陽市鳳凰山）、大宝寺塔（朝陽市鳳凰山北沟）、青峰寺塔（朝陽県西営子郷）など、方形十三層磚塔も認められる。これは、朝陽北塔の影響下において建立されたものとみられ、浮彫尊像の構成も共通する点が多い。また、東平房塔（朝陽市竜城区太平房鎮）および石仏寺塔（瀋陽市瀋北新区朝鮮族錫伯族郷）のように、六角多層の磚塔も認められた。

このような塔の平面プランの変遷に関しては、遼代の墳墓形式との関係を示唆する研究も行われている。唐代、朝陽（当時の営州）には漢人が居住しており、彼らの墳墓は方形のものが多かったという²⁸。遼代の中期以降、方形から円形の墳墓が増加し、さらに遼末に六角形の墳墓が出現する。朝陽北塔などが方形プランであるのは唐代建立の方形木塔を継承していることとともに、このような墳墓形式の影響を受け、方形から八角形へ、さらに六角形の磚塔が出現するに至った可能性がある。また、塔の南面に玄室と陀羅尼經幢を設けたものもある。

なお、今回調査におよぶことができなかった塔および第一層塔身に浮彫尊像を伴わないために取り上げなかった塔、浮彫尊像の状態が良くないために取り上げなかった塔などもある。そのいくつかを挙げれば、遼州城址の西南に位置する遼濱塔（新民市公主屯鎮、八角十三層磚塔）、順州城址の西北に位置する十家塔（阜新市、八角十三層磚塔）、成州城址の東北の郊外の丘陵に位置するに紅帽子塔（阜新市、八角十三層磚塔）、双州城址の西北に位置する石仏寺塔（瀋陽市瀋北新区、六角多層磚塔）、復州城址の東南に位置する永豊寺塔（瓦房店市、八角十三層磚塔）などである。これらの塔および表中に取り上げた塔は、大半が遼代の城址の四隅および近郊に位置する丘陵に建てられている。このような塔の立地

も、いわゆる遼塔の特徴の一つといえる。

これについては、仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』に「若人能書写此陀羅尼。安高幢上。或安高山或安楼上。乃至安置卒堵波中。(中略)彼諸衆生所有罪業。應墮惡道地獄畜生閻羅王界餓鬼界阿修羅身惡道之苦。皆悉不受亦不為罪垢染汚。(中略)於四衢道造卒堵波。安置陀羅尼」²⁹とあり、仏頂尊勝の陀羅尼を書写し、高幢、高山や楼上などの高所に納める、ないしは塔の中に安置し、そのような塔を四衢道に建てることにより、様々な罪業により地獄などの惡道に墮ちることになったとしても、それを受けることなく罪に汚れることはないとする内容が参考になろう。朝陽や瀋陽では、かつては街の四方に塔が建立されている。朝陽北塔のように、塔の中に仏頂尊勝陀羅尼經幢(1044年頃)が納められることが多く³⁰、朝陽東塔からも陀羅尼經幢が出土している。いわゆる遼塔の立地場所は、『仏頂尊勝陀羅尼經』とその陀羅尼を記した經幢を納める塔としての理解があったと推測される。

また、本經の序文には、仏陀波利が唐の五台山に登り文殊に拜謁しようと懇願したところ、この「仏頂尊勝陀羅尼經」を初来して流布させることになったいわれが記されている³¹。当時の五台山は北宋の領有するところであったが、遼とも隣接する地域であり、これらの塔を五台山信仰との関わりにおいて考える必要があろう。

4. 第一層塔身浮彫尊像について

今回の現地調査において確認できた第一層塔身の浮彫尊像は、いずれも保存状態が良いとはいえず、後世の補修がおよぶ尊像も少なくない。塔そのものも重修が重ねられ、軒、梁や屋根などの建築部材も後世のものに変えられていることが少なくない。そのため、塔の建築的特徴と形による建立年代の判定はしがたいのが現状といえる。

しかし、浮彫尊像の表し方には明確な違いがある。龕を設けその中に丸彫に近い如来坐像を安置するものと、壁面に直接浮彫するものがある。そして、如

来像および菩薩像の浮き出しの高・低などの立体感や体軀表現においても、いくつかの相違を認めることができた。これまで遼塔と一括されてきた塔を、ここでは第一層塔身の浮彫像の表現の差違をもとに、前後関係を整理してみたい。

まず、第一層塔身の彫刻面は、横幅の広いもの(朝陽北塔など)から縦長のもの(広勝寺塔、崇興寺双塔、遼陽白塔など)へ変化していく傾向がある。また、表面に浮彫により尊像をあらわすもの(朝陽北塔、青峰塔など)から龕を設けてその中に如来坐像をあらわすもの(塔管子塔、広勝寺塔など)へ変わり、さらに菩薩像も象眼内にあらわすもの(広勝寺塔、崇興寺東塔)が出現する。また、宝塔とともに題箋状の区画内に宝塔名を記すもの(朝陽北塔、雲接寺塔)から宝塔のみ浮彫するもの(大宝塔、青峰塔)へ移行し、さらに朝陽県双塔寺双塔のうち西塔のように、尊像が省略され、龕を設ける南面以外の壁面に宝塔のみあらわすものへの展開していくようである。

ここであらかじめ遼代および金代の仏教造像の特徴を大まかに確認しておきたい。いずれも十分な作例が残されているとはいえず、また、後世の手が加えられる場合も少なくないが、山西省大同下華嚴寺(重熙七年〔1038])および山西省応県仏宮寺釈迦塔(応県木塔、清寧二年〔1056])の遼代の諸像³²と、山西省定襄洪福寺および山西省朔州崇福寺の金代の諸像、金の明昌六年(1195)銘のある木造観音・勢至菩薩立像(トロント、ロイヤル・オンタリオ美術館所蔵)³³など、遼代と金代の造像を比べると、正面の幅に対して側面における像の奥行きが十分ではない体軀と正面・側面ともに充実した膨らみを持つ体軀との違い、力の抜けた流麗な衣文線と剛直な力漲る衣文線との違いなどに顕著な相違が認められる。総じて、遼代の造像は丸い顔立ちをしていてもあまり強い張りは感じさせず、全体的に力が抜け、特に上半身に間延びした感がある。それに対して金代の造像は、全体的に大振りで、力が漲っているようである。もちろん、河北省北部および北京市内に現存する遼代・金代の作例をも視野に入れ、より総

合的に判断する必要がある。

それでは、これまでに概観した第一層塔身に浮彫される尊像について、体軀表現や立体感の把握などに着目しながら見てみると、およそ次のように大別することが出来るであろう。

まず第一に、全体的に平坦で奥行きが浅い浮彫であるが、細部まで行き届いた造形が認められ、平面的でありながらエッジの処理にデリケートな感覚を持ち、斜め上からの視点や斜め下からの視点を取り入れながら、あくまでも浮彫像として合理的に表現しようとするものである。朝陽北塔の西面如来坐像がこれにあたり、朝陽北塔の重修時、重熙十一～十三年（1042～1044）頃の造像と思われる。なお、朝陽北塔の北面如来坐像の台座にあらわされた五羽の金翅鳥が、嘴を突出させ、頭部を立体的にあらわしている点から、平坦な浮彫からより奥行きのある浮彫へと次の展開がうかがえる。このような頭部が浮き出た鳥獣座の表現は雲接寺塔に見い出せる。

第二に、頭部の奥行きが増すが、体軀はそれに追いつかず、上半身から下半身まで、平坦な隆起が表面を覆うものである。大宝塔は、鳥獣座は平坦ながらも、尊像頭部の前面への突出を見せている。青峰塔なども頭部の奥行きに対して体部は扁平な像である。また、面部の突出に沿うように次第に頬の丸みも強い。

第三に、頭部を中心にさらに奥行きが増し、側面観における体軀の起伏も考慮された浮彫像である。浮彫の奥行きに合わせて、八稜観塔や青峰塔のように、顔の輪郭が穏やかな卵形からやや下膨れの感が増し、頬に十分な丸みをもつ顔立ちが見られる。また、ここでは頭部の突出に合わせ、天蓋・台座の奥行きも深い。しかし、天蓋は朝陽北塔西面に認められたような、斜め下から仰ぎ見る視点は採られず、底面に配慮がなされていない。

第四に、頭・体ともに側面観において起伏のない均一な奥行きをもち、如来坐像においてはほぼ丸彫に近い浮彫像である。塔営子塔、広勝寺塔、崇興寺西塔などに見られる。また、青峰塔や八稜観塔においては、如来像はそのまま塔の表面に浮彫するが、

塔営子塔ではさほど深さはないが龕を設け、その中に如来像をあらわす。彫刻の奥行きが増したため、壁面に龕を設ける必要が生じ、その中にあらわす手法が選択されたといえよう。広勝寺塔、崇興寺西塔など、さらに龕の奥行きが増し、丸彫に近い如来像があらわされる。

第五に、遼陽白塔や広濟寺塔のように、塔身の表面に深い龕を設け、別材より彫出したほぼ丸彫（ないし高浮彫）の如来坐像を安置する。

全体的な傾向としては、次第に突出の強い、立体感のある浮彫像に変化していき、造形そのものが大まかになる傾向がある。そしてこれは、先に触れた遼代と金代の彫像にみられる相違とも関連付けられよう。すなわち、①朝陽北塔西面の浮彫像のように、平坦でありながら浮彫として合理的な表現が見られるものから、②頭部を中心に浮彫の高さが増し、さらに③体軀全体が浮き上がる傾向に拍車がかかると、④龕を彫りくぼめることによってそれを容易にし、その龕も次第に深くなり、⑤塔身と共材から浮彫するのではなく、別材製の丸彫像ないし高浮彫像を安置するようになるといえる。このような彫刻の推移を年代差に置き換えるならば、比較的年代の明らかな朝陽北塔と広勝寺塔を基準とし、①は重熙年間（1032～1055）、④は遼末金初（12世紀前半）となる。そして、その間、11世紀後半にかけて②から③に見られる浮彫の立体化とそれに伴う龕の出現が起り、⑤は金代以降の造像と推測されよう。

なお、第一層塔身に龕を設けて如来坐像を配置するようになると、各面に宝塔があらわされなくなることも、塔の信仰のあり方を考察するにおいて留意すべき点である。

5. むすびにかえて

以上のように、いわゆる遼塔における重要な特徴の一つである第一層塔身の浮彫尊像の現状と概要をまとめ、そこから大まかな推移を概観した。その結果、遼塔と総称される塔には遼末から金代に降るものも含まれており、塔にあらわされる浮彫尊像は、

体躯表現や衣文などの質において、寺院に安置される彫像と呼応した変化を十分にたどることができる可能性がうかがえた。このように、先学が触れたごとく、第一層塔身の浮彫尊像に着目することは大きな意義があるといえる。また、いわゆる遼塔は当時の城址の四隅ないし近郊の丘陵に建立されることが多いことから、『仏頂尊勝陀羅尼經』に説かれる陀羅尼の効果的な安置法がその立地に影響を与えていることに触れた。

今後の課題は、どのような舍利信仰、思想に基づき、このような仏塔が建立されたのかという教理的な問題を浮彫尊像の構成や図像的特徴からさらに考察することである。朝陽北塔は金剛界曼荼羅を立体化させたものであるといわれることが多い³⁴。遼代仏教の主流は華嚴宗であり、華嚴思想と融合した密教も盛んであったと理解されている³⁵。しかし、融合にも様々な融合の仕方があり、山西省五台山の周辺、燕州（北京）周辺、上京や中京が置かれた内蒙古自治区内など、遼の版図は広い。特に山西省五台山は、北宋の領有であったが遼とも近く、華嚴と密教の融合という観点からも、十分影響関係を考えるべき地域であろう。様々な融合のあり方をむしろ造形作品にたどることで明らかにしていきたい。かつて別稿において、12世紀後半の五台山における華嚴復興の動きが、石窟の造像において具体的にどのような形となって現れたのか、陝西省北部の北宋時代の石窟を例に取り上げて考察におよんだ³⁶。北宋の陝北石窟には、普遍的な三世仏（釈迦・阿弥陀・弥勒）、諸難救済の観音菩薩、地藏十王とともに、涅槃以降に限定された仏伝モチーフが浮彫されることが多いが、これは単に禅宗の普及による釈迦への回帰ではなく、華嚴の説く超人的釈迦への期待であり、真の如来となった涅槃以後の普遍的な効力を発揮する如来に対する信仰であると述べた。朝陽北塔などの四仏は、確かに金剛界の四仏の印相を結び、鳥獸座に坐すけれども、左右に八大靈塔を伴うなど、単に金剛界曼荼羅としてしまうには慎重を期すべき点もある。八角多層塔の八軀の如来像への展開を考察する際にも、特定の曼荼羅に限定せずに

おきたい。『契丹大藏經』の編纂事業などから、遼代の仏教は当時の東アジアの仏教の縮図ともいえるほどの総合性・普遍性を持っていたと思われるからである。

今後の課題は多く残されているが、まずは遼の各地域ごとの仏教美術の造形的特徴を把握し、さらには北宋および高麗の造像との比較を通し、遼代の仏塔信仰を塔身の浮彫尊像から考察していきたい。

註

1 かつては「遼金塔」ないし「遼系の仏塔」と総称された。旧満州地域における遼塔の調査は戦前から行われており、遼代に建立されたとみられる塔を①八角多層の木塔（山西省応県仏宮寺釈迦塔）、②八角多層の軛塔・第1類（第一層の外壁に尊像の彫刻を施さないもの。北京市房山区雲居寺塔など）、③八角多層の軛塔・第2類（第一層の外壁に尊像の彫刻を施すもの。慶州白塔など）、④八角多層の軛塔・第1類（第一層の外壁に尊像の彫刻を施すもの。第二層以上も第一層と同様に斗栱を用いるもの。北京市房山区雲居寺南塔など）、⑤八角多層の軛塔・第2類（第一層の外壁に尊像の彫刻を施すもの。第二層以上は積み出し持ち送り式とするもの。錦州市広濟寺塔など）、⑥四角多層の軛塔（朝陽北塔など）、⑦八角異形の軛塔（上部に円錐形の相輪舞を積み上げるもの。北京市房山区雲居寺北塔など）、⑧石塔、⑨鉄塔と分類した上で、特に④⑤に着目し、特徴を列挙する。村田治郎「遼代仏塔概説」、『建築学会大会論文集』、1942年4月、pp.13～19。

2 主に次の先学による調査研究において、遼寧省の遼塔の特徴はおよそ次のようにまとめられている。

- (1) 多（八、六）角・多（九、十一、十三）層の磚築である。
- (2) 塔の内部は中実で入れない（稀に第一層に室を設けるものがある）。
- (3) 磚は壁の部分だけ使用する。
- (4) 基壇を高く造り、外部に蓮座などの彫刻を全面に施す。
- (5) 第一層の外壁に仏像などの彫刻を施す。
- (6) 第二層以上の壁面は低く、これに鏡を貼り付ける。
- (7) 頂上に磚築の蓮座が二重、その上に半球形が載り、それから相輪の鉄棒が建てられる。

特に第一層塔身の浮彫像に関して、村田治郎氏は「いちじるしく大きな軛塔に、大きな浮き彫をしており、その彫刻の構図がかつて先例のない」とされ、遼塔の最も大きな特徴の一つと強調されている。

・伊東忠太「満州の仏塔」、『建築雑誌』第252号、1907年12月、pp.24～30。

・神尾式春「契丹の仏塔」、『契丹仏教文化史考』、満州文化協会、1937年1月、pp.62～77。

・村田治郎「遼系の仏塔」、『満州の史蹟』、座右宝刊行会、1944年5月、p.425。

- 3 実地調査は2010年8月26日～9月12日にかけて行われた。
- 4 石仏寺塔（瀋陽市瀋北新区朝鮮族錫伯族郷）は、遼代の双州城址の西北の城外に位置する七星山の山頂に建つ。六角七層の磚塔であるとされるが、現在は塔身は崩壊しており、現状において何層であったかは確認できない。1982年に行われた地宮の発掘調査により、遼の咸雍十年（1074）に建造したことを記す石碑が出土している。かろうじて残されていた南、東南、西北の三面もいずれも最近の修理の手が入っており、当初の彫刻は皆無である。
- 5 永豊寺塔（瓦房店市復州城鎮）は、遼代の復州城址の東南角に建つ。八角十三層磚塔であり、倒壊は免れていたが、表面が著しく崩れていたものを近年修復している。軒下部、基壇、塔身の飛天に比較的古い部分が残されていたが、現状において、当初とみられる彫刻部は皆無である。塔身には八方に龕が設けられているが、いずれも近年の後補である。
- 6 遼濱塔は丘陵地に設けられた遼州城址の西南の城外に位置する八角十三層磚塔である。北面の基壇下部に扉を設けている。乾統十年（1110）の創建とされるが、浮彫尊像の大半に補修がおよび、近年における重修も受けている。塔の脇に1997年の重修碑が建てられている。
- 7 建築構造的に塔の年代判定の難しさについては、戦前の調査時から研究者たちを悩ませたようである。「実地の上で、唐、遼、金、明と一一明確に様式手法の差別が見えれば素より論はないのですが、事実はこちらに反対です、何れも明清の世に大修繕が加へられたので一見して其創立年代を考へることは到底出来なくなつて仕舞たのです」。前掲註2伊東忠太論考、p.28。
- 8 遼寧省文物考古研究所・朝陽市北塔博物館編「第八章 朝陽北塔修建歴史及相關問題之研究」、『朝陽北塔－考古発掘与維修工程報告』、文物出版社、2007年8月、pp.123～147。
- 9 「令聊記石匣内」題記、前掲註8『朝陽北塔－考古発掘与維修工程報告』、図版62。

- 10 村田治郎「満州国朝陽の遼代碑文と仏塔」、『建築学会論文集』第27、1942年11月、pp.26～29および王栄国「也談朝陽遼代三塔」、楊曾文・肖景林主編『中国仏教的仏舎利崇奉和朝陽遼代北塔』、宗教文化出版社、2009年6月、pp.240～249。
- 11 三重の円筒形経塔の最も外側の金製円筒に、中央に智拳印を結ぶ大日如来坐像をあらわし、その左右二列二段ずつ、天蓋・蓮華座をともなう八大宝塔名が記されている。その塔名は朝陽北塔の各面と同じである。如来像の宝冠には五仏あらわされ、大衣の縁の文様など、細部まで細かく彫出されている。最も内側の金製円筒には、宝冠を戴く大日如来を中心に周囲に八大菩薩が線刻されており、「重熙十二年四月八日」の年記が刻まれる。前掲註8『朝陽北塔－考古発掘与維修工程報告』、図版41～44。
- なお、1988年の調査時に天宮より発見された『延昌寺大塔下重熙十二年四月八日再葬舍利記』など、重熙十一年（1042）、同十二年（1043）、同十三年（1044）の年記を伴うものがあり、この頃に重修され、天宮および地宮に宝物が重葬されたことが知られる。前掲註8『朝陽北塔－考古発掘与維修工程報告』、p.67、p.138。
- 12 前掲註8『朝陽北塔－考古発掘与維修工程報告』、p.139。
- 13 周業利「朝陽遼塔磚雕芸術」、前掲註10『中国仏教的仏舎利崇奉和朝陽遼代北塔』、pp.289～307。
- 14 かつては大宝塔と鳳凰山小塔、雲接寺塔を鳳凰山大塔を称していた。前掲註2村田治郎論考、p.448および竹島卓一「第五章 鳳凰山の磚塔」、『遼金時代の建築と其仏像』、龍文書局、1944年12月、pp.217～225。
- 15 「保存比較的良好にして、旧時全面に施されし白色の塗料の如きも猶相当に遺存している」とあるが、2010年9月5日の調査時において、彫像の面部を中心に彫り直しなどの手が加えられていた。竹島卓一「第五章 鳳凰山の磚塔」、前掲註14『遼金時代の建築と其仏像』、pp.219。
- 16 村田治郎氏は「塔子山上にたつ（中略）八角十三檐塔」、竹島卓一氏は「塔子山の磚塔」と称する。前掲註2村田治郎論考、p.449および竹島卓一「第八章 塔子山の磚塔」、前掲註14『遼金時代の建築と其仏像』、p.236～239。
- 17 1940年代は「下部は多少後世の補修をうけて当初の手法を窺ひ難くなつてゐる所もあるが、大体に於いて保存良好にしてよく当初の性質を遺存し」ていたようである。前掲註16竹島卓一論考、p.236。
- 18 「近世の拙劣なる補修を受け、旧時の性質を失つてゐる部分の多いのは惜しむべきである」、また「仏像は近世の補修多く、頗る拙劣にして、印契の如きも明瞭を欠き、西面の弥陀の定印の外、明確なものはない」とされ、すでに多くの手が加えられた状態であったことがうかがえる。竹島卓一「第七章 黄花堂の磚塔」、前掲註14『遼金時代の建築と其仏像』、p.232～235。
- 19 各面に設けられた区画内の銘文は以下の通りである。東面：「徑□阿李」、東南面：「李□祥」、西南面：「劉節度□」、西面：「劉中郎度」、西北面：「劉安禮賓」、北面：「王君才」、東北面：「王俊臣」。
- 20 前掲註2村田治郎論考、p.429。
- 21 かつては嘉福寺塔と称されていた。前掲註2村田治郎論考および竹島卓一「第十章 義県嘉福寺の磚塔」、前掲註14『遼金時代の建築と其仏像』、p.244～247。
- 22 前掲註2村田治郎論考、pp.457。
- 23 前掲註2村田治郎論考、pp.454～461および田中淡「遼陽白塔」、『世界美術大全集』東洋編6南宋・金、小学館、1998年、p.432。
- 24 村田治郎氏は「五十家子の六角多檐塔」、竹島卓一氏は「五家子の磚塔」と称する。前掲註2村田治郎論考、p.448および竹島卓一「第六章 五家子の磚塔」、前掲註14『遼金時代の建築と其仏像』、p.226～231。
- 25 2010年9月5日現在は修復工事中であり、「2010年6月」の刻印の入った磚が修理に使用されていた。表面の痛んだ部分の磚を取り外し、新しい磚をセメントではめ直すという作業内容のようであった。
- 26 前掲註24竹島卓一論考、p.229。
- 27 前掲註24竹島卓一論考、p.230。
- 28 向井佑介「朝陽北塔考－仏塔と墓制からみた遼代の地域－」、『遼文化・遼寧省調査報告書2006』京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル時代の多元的人文学の拠点形成」、2006年3月、pp.190～195。
- 29 『大正新脩大藏經』19－351中。

- 30 前掲註8『朝陽北塔-考古発掘与維修工程報告』、pp.84～95、図版64～72。
- 31 『大正新脩大藏經』19-349中。
- 32 仏宮寺釈迦塔（応県木塔）の諸像に関しては、次の論考を参照した。朴亨國「中国山西省応県仏宮寺釈迦塔（応県木塔）の塑像群について」、『名古屋大学古川総合資料館報告』14号、1998年12月。
- 33 田邊三郎助「観音・勢至菩薩立像」、前掲註23『世界美術大全集』東洋編6南宋・金、p.394。
- 34 前掲註2村田治郎論考および前掲註14竹島卓一論考。
- 35 遼代の仏教についての研究は、前掲註2神尾式春論考および野上俊静氏の『遼金の仏教』にはじまる。その後、脇谷摺謙氏、鎌田茂雄氏および竺沙雅章氏などにより、まず、華嚴教学の歴史の中で遼代華嚴宗の位置づけを確認したうえで、そこから密教との融合に関しても言及されている。以下、前掲註2神尾式春論考の他に、遼代仏教そのものを取り上げた代表的な先行研究のみ列挙する。
- ・野上俊静『遼金の仏教』、平楽寺書店、1953年9月。
 - ・鎌田茂雄「華嚴思想史よりみた遼代密教の特質」、『印度学仏教学研究』第8巻第2号、1960年3月、pp.649～654。
 - ・竺沙雅章「遼代華嚴宗の一考察-主に、新出華嚴衆典籍の文献学的研究-」、『宋元仏教文化史研究』、汲古書院、2001年10月。
 - ・藤原崇人「遼代興宗朝における慶州僧録司設置の背景」、『仏教史学研究』第46巻第2号、仏教史学会、2003年、pp.1～22。
 - ・嵩満也「朝陽北塔発掘調査報告書から見る遼代仏教文化の特色」、『中国北方仏教文化研究における新視座』龍谷大学国際社会文化研究所叢書3、同朋社、2004年3月、pp.137～156。
- 36 拙稿「中国陝西省延安市安塞県樊庄石窟について-陝北地方における北宋の石窟造営とその背景に関するてがかりとして-」、『密教図像』27号、密教図像学会、2008年12月、pp.69～86。

付記

今回の調査および本稿は、平成22年度科学研究費補助金による学術研究「美術に即した文化的・国家的自己同一性の追求・形成の研究—全アジアから全世界へ」（基盤研究（S）、研究代表者：東京大学大学院教授・小川裕允）における研究の一端である。宗教彫刻分野における研究は武蔵野美術大学教授・朴亨國が担当し、青山学院大学教授・浅井和春および水野さやが分担し、武蔵野美術大学非常勤講師・萩原哉、東京大学大学院博士後期課程・佐藤有希子、武蔵野美術大学大学院博士後期課程・林碩奎が協力した。

なお、掲載した図版のうち、図8-2は東方文化学院東京研究所『遼金時代ノ建築ト其仏像』図版下冊、1935年3月、p.75からの複写であり、図4-2は遼寧省文物考古研究所の提供による。その他はいずれも朴亨國および水野さやの撮影による。

（みずの・さや 芸術学／東洋美術史）
（2010年10月29日受理）

〔表〕第一層塔身の浮彫尊像

※ 2010年9月の調査時における状況による。
 名称に付された番号は、本文中の番号に対応する。
 各塔の現状における高さは、主に以下の資料を参考にした。
 ・遼寧省文物考古研究所・朝陽市北塔博物館編『朝陽北塔—考古発掘と修復工程報告』、文物出版社、2007年8月
 ・陽曾文・肖景林主編『中国仏教的の舎利崇奉と朝陽北塔』、宗教文化出版社、2009年6月
 ・国家文物局編『中国文物地図集』遼寧分冊上・下、西安地図、2009年7月

名称 構造 現高(m)	所在	方角	中尊像		脇侍像		宝塔(八大壺塔)		飛天	その他 ※備考
			手印/持物	台座 その他	右 持物・手印	左 持物・手印	右	左		
①朝陽北塔 方形十三層 42.6	朝陽市 老城区	東	宝冠如来坐像 左:拳を握り腹前 右:触地印	鳥獣座 象(5)	菩薩踰躞像 華盤	菩薩踰躞像 香炉	塔身に涅槃仏 位牌型に塔名 あり「沙羅林 中圓寂塔」	塔身に維摩 位牌型に塔名 あり「菴羅衛 林維摩塔」	中尊像および 宝塔の天蓋の 左右に各 2 軀(計 6 軀)	・南面基壇部 に龕を設ける。
		南	宝冠如来坐像 左:拳を握り腹前 右:与願印	鳥獣座 馬(5)	菩薩踰躞像 華盤	菩薩踰躞像 香炉	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「菩提樹 下成仏塔」	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「浄飯王 宮生處塔」	中尊像および 宝塔の天蓋の 左右に各 2 軀(計 6 軀)	
		西	宝冠如来坐像 左・右:定印 第1・2指を捻ず	鳥獣座 孔雀(5)	菩薩踰躞像 華盤	菩薩踰躞像 香炉	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「給孤独 園名称塔」	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「鹿野苑 中法輪塔」	中尊像および 宝塔の天蓋の 左右に各 2 軀(計 6 軀)	
		北	宝冠如来坐像 左:拳を握り腹前 右:施無畏印	鳥獣座 金翅鳥(5)	菩薩踰躞像 華盤	菩薩踰躞像 香炉	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「著闍提 山般若塔」	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「曲女城 迦宝奇塔」	中尊像および 宝塔の天蓋の 左右に各 2 軀(計 6 軀)	
朝陽南塔 方形十三層 45	朝陽市 老城区	東	浮彫尊像はなし 門扉を彫出し、天蓋と雲をあらわす		なし	なし	位牌型に塔名 あり「沙羅林 中圓寂塔」	位牌型に塔名 あり「菴羅衛 林維摩塔」	なし	※現状にお いて浮彫尊 像はないが、 本来はあつ たと推測さ れる。
		南	浮彫尊像はなし 龕を設け、周囲に雲をあらわす		なし	なし	位牌型に塔名 あり「菩提樹 下成仏塔」	位牌型に塔名 あり「浄飯王 宮生處塔」	なし	
		西	浮彫尊像はなし 門扉を彫出し、天蓋と雲をあらわす		なし	なし	位牌型に塔名 あり「給孤独 園名称塔」	位牌型に塔名 あり「鹿野苑 中法輪塔」	なし	
		北	浮彫尊像はなし 門扉を彫出し、天蓋と雲をあらわす		なし	なし	位牌型に塔名 あり「著闍提 山般若塔」	位牌型に塔名 あり「曲女城 迦宝奇塔」	なし	
②雲接寺塔 方形十三層 32	朝陽市 鳳凰山	東	宝冠如来坐像 左:拳を握り腹前 右:触地印	鳥獣座 象(5)	菩薩立像 合掌	菩薩立像 合掌	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「沙羅林 中圓寂塔」	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「菴羅衛 林維摩塔」	中尊像および 宝塔の天蓋の 左右に各 2 軀(計 6 軀)	・南面基壇部 に龕を設ける。
		南	宝冠如来坐像 左:拳を握り腹前 右:与願印	鳥獣座 馬(5)	菩薩立像 蓮華	菩薩立像 蓮華	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「菩提樹 下成仏塔」	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「浄飯王 宮生處塔」	中尊像および 宝塔の天蓋の 左右に各 2 軀(計 6 軀)	
		西	宝冠如来坐像 左・右:定印 第1・3・4指を捻ず	鳥獣座 孔雀(5)	菩薩立像 左:腹前 右:胸前	菩薩立像 左:腹前 右:腹前	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「給孤独 園名称塔」	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「鹿野苑 中法輪塔」	中尊像および 宝塔の天蓋の 左右に各 2 軀(計 6 軀)	
		北	宝冠如来坐像 左:拳を握り腹前 右:施無畏印	鳥獣座 金翅鳥(5)	菩薩立像 左:胸前 右:腹前	菩薩立像 左:腹前 右:胸前	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「著闍提 山般若塔」	塔身に仏坐像 位牌型に塔名 あり「曲女城 迦宝奇塔」	中尊像および 宝塔の天蓋の 左右に各 2 軀(計 6 軀)	
③大宝塔 方形十三層 16.5	朝陽市 鳳凰山北沟	東	宝冠如来坐像 左:拳を握り腹前 右:触地印	鳥獣座 象(5)	なし	なし	塔身に門扉 位牌型のみあ り	塔身に門扉 位牌型のみあ り	中尊像天蓋の 左右に2軀	・南面基壇部 は補修。本 来は龕を設 けるか。

		南	宝冠如来坐像 左:拳を握り腹前 右:与願印	鳥獸座 馬(5)	なし	なし	塔身に門扉 位牌型のみあり	塔身に門扉 位牌型のみあり	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西	宝冠如来坐像 左:右:定印 第1・2指を捻ず	鳥獸座 孔雀(5)	なし	なし	塔身に門扉 位牌型のみあり	塔身に門扉 位牌型のみあり	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		北	宝冠如来坐像 左:拳を握り腹前 右:施無畏印	鳥獸座 金翅鳥(5)	なし	なし	塔身に門扉 位牌型のみあり	塔身に門扉 位牌型のみあり	中尊像天蓋の 左右に2軀	
④青峰塔 方形十三層 29	朝陽県 西営子郷 五十家子村	東	如来坐像 左:胸前に置く 右:触地印	鳥獸座 象(5)	菩薩坐像	菩薩坐像 華盤?	塔身に方形龕	塔身に方形龕	中尊像天蓋の 左右に2軀	・南面基壇に 龕を設け、 左右に金剛 力士像をあ らわす。 ・基壇部の象 眼内に獅子 をあらわす。
		南	宝冠如来坐像 左:拳を握り腹前 右:与願印	鳥獸座 馬(5)	菩薩立像 華盤	菩薩立像 香炉	塔身に方形龕	塔身に方形龕	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西	如来坐像 左:右:定印 第1・2指を捻ず	鳥獸座 孔雀(3)	菩薩坐像 香炉	菩薩坐像	塔身に方形龕	塔身に方形龕	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		北	如来坐像 左:拳を握り腹前 右:施無畏印	鳥獸座 金翅鳥(3)	菩薩立像	菩薩立像	塔身に方形龕	塔身に方形龕	中尊像天蓋の 左右に2軀	
⑤八棱観塔 八角十三層 34.4	朝陽県 太平房鎮 八棱観村	東	着甲、五髻を結う菩薩坐像 左:胸前に置く 右:胸前やや下方に置く (手首先欠、持物不明)	蓮華座 八角框	供養者立像 合掌	供養者立像 合掌	塔身に仏坐像	塔身に仏坐像	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		東南	着甲、宝冠を戴く菩薩坐像 左:宝蓋 右:膝に置か?	蓮華座 八角框	供養者立像 合掌	供養者立像 合掌	塔身に仏坐像	塔身に仏坐像	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		南	着甲する菩薩坐像(頭部欠) 左右:腹前に置く	蓮華座 八角框	供養者立像 合掌	供養者立像 合掌	塔身に仏坐像	塔身に仏坐像	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西南	(頭体とも表面剥落) 左右:腹前に置く	蓮華座 八角框	供養者立像 合掌	供養者立像 合掌	塔身に仏坐像	塔身に仏坐像	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西	菩薩坐像(頭部後補、剥落 多い) 着甲するか? 左右:腹前に置く	蓮華座 八角框	供養者立像 合掌	供養者立像 合掌	塔身に仏坐像	塔身に仏坐像	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西北	宝冠を戴く菩薩坐像 (体部破損、不明)	蓮華座 八角框	供養者立像 合掌	供養者立像 合掌	塔身に仏坐像	塔身に仏坐像	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		北	(頭体ともに表面破損)	蓮華座 八角框	供養者立像 合掌	供養者立像 合掌	塔身に仏坐像	塔身に仏坐像	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		東北	着甲、宝冠を戴く菩薩坐像 左:膝上に置く 右:胸前で独結杵	蓮華座 八角框	供養者立像 合掌	供養者立像 合掌	塔身に仏坐像	塔身に仏坐像	中尊像天蓋の 左右に2軀	
⑥黄花灘塔 八角十三層 30	朝陽県 太平房鎮 黄花灘村	東	如来立像 左:第1・4指を捻じ腹前 右:第1・4指を捻じ胸前	蓮華座	なし	なし	なし	なし	なし	右側に記銘 「徑□阿李」
		東南	如来立像 左:第1・4指を捻じ腹前 右:第1・4指を捻じ胸前	蓮華座	なし	なし	なし	なし	なし	右側に記銘 「李□祥」
		南	浮彫尊像はなし 龕を設け龕奥壁に仏坐像(清代)を描く		なし	なし	なし	なし	龕上の華盤の 左右に2軀	
		西南	如来立像 左右:ともに第1・4指を捻 じ胸前	蓮華座	なし	なし	なし	なし	なし	左側に記銘 「劉節度□」
		西	如来立像 左:右:定印。第1・2指を捻 ず?	蓮華座	なし	なし	なし	なし	なし	左側に記銘 「劉中郎度」
		西北	如来立像 左:第1・4指を捻じ腹前 右:左手にかざす	蓮華座	なし	なし	なし	なし	なし	左側に記銘 「劉安禮資」

		北	如来立像 左:指先を下に向け腹前に置く。指を捻す? 右:左手にかざす	蓮華座	なし	なし	なし	なし	右側に記銘「王君才」
		東北	如来立像 左:腹前に置く 右:左手にかざす。第1・4指を捻す?	蓮華座	なし	なし	なし	なし	右側に記銘「王俊臣」
⑦塔宮子塔 八角十三層 31.5	卓新市 塔宮子郷 塔宮子村	東	如来坐像 左:腹前または膝上に置く? 右:胸前に置く	蓮華座 方形框	菩薩立像	菩薩立像	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	如来坐像を龕内にあらわす。 ※東から南面にかけては、工事用の建材とシートにより確認が困難。
		東南	如来坐像 左右:腹前で緊縛印	蓮華座 方形框	菩薩立像 合掌	菩薩立像 合掌	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	
		南	如来坐像 左右?(工事用建材で不明)	蓮華座 方形框	菩薩立像	菩薩立像	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	
		西南	如来坐像 左:触地印 右:施無畏印	蓮華座 方形框	菩薩立像 華盤か?	菩薩立像 華盤か?	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	
		西	如来坐像 左右:定印	蓮華座 方形框	菩薩立像 合掌、蓮蕾を挟む	菩薩立像 合掌、蓮蕾を挟む	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	
		西北	如来坐像 左:与願印 右:施無畏印	蓮華座 方形框	菩薩立像 腹前、両手を水平に重ねる	菩薩立像 腹前、両手を水平に重ねる	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	
		北	如来坐像 左:腹前に置く 右:施無畏印	蓮華座 方形框	金剛力士立像	金剛力士立像	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	
		東北	如来坐像 左:腹前に置くか? 右:胸前に置く	蓮華座 方形框	菩薩立像 合掌	菩薩立像 合掌	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	
⑧広勝寺塔 八角十三層 40	義県 義州鎮	東	宝冠如来坐像 左:腹前に置く 右:胸前に置く	蓮華座 獅子	菩薩立像	菩薩立像	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	如来坐像を龕内にあらわす。
		東南	宝冠如来坐像 左:胸下に置く 右:胸前に置く	蓮華座 八角框	菩薩立像	菩薩立像	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	菩薩立像を象眼内にあらわす。 ・基壇部の象眼内に獅子をあらわす。
		南	宝冠如来坐像 智拳印(右手上)	蓮華座 獅子	菩薩立像	菩薩立像	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	
		西南	宝冠如来坐像(面部欠) 左:腹前に置くか? 右:胸前に置くか?	蓮華座 八角框	菩薩立像	菩薩立像	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	※各面とも、上方の蓮華に鏡1枚を填めたか?
		西	宝冠如来坐像 左右?(工事用建材で不明)	蓮華座 獅子	菩薩立像	菩薩立像	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	※西から東北面にかけは、工事用のシートおよび枝葉に覆われ、手印の確認は不可能。
		西北	宝冠如来坐像 左右?(工事用建材で不明)	蓮華座 八角框	菩薩立像	菩薩立像	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	※他面も工事用建材により、菩薩像の手印の確認は困難。
		北	宝冠如来坐像 左右?(工事用建材で不明)	蓮華座 獅子	菩薩立像	菩薩立像	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	
		東北	宝冠如来坐像 左右?(工事用建材で不明)	蓮華座 八角框	菩薩立像	菩薩立像	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	
⑨崇興寺塔 東塔 八角十三層 43.8	北鎮市 広寧鎮	東	宝冠如来坐像(頭体後補) 左:腹前に置く 右:胸前に置く	蓮華座 八角框	菩薩立像 (面部後補) 華盤	菩薩立像 (面部後補) 華盤	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	如来坐像を龕内にあらわす。
		東南	宝冠如来坐像(頭体後補) 左:腹前に置く 右:胸前に置く	蓮華座 八角框	菩薩立像 (面部後補) 左:胸下/右:胸前	菩薩立像 (面部後補) 左:胸前/右:胸下	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	菩薩立像を象眼内にあらわす。 ・各面に鏡を計4枚填める。
		南	宝冠如来坐像(面部後補) 智拳印(右手上)	蓮華座 八角框	菩薩立像 (面部後補) 香炉	菩薩立像 (面部後補) 円形持物?	なし	中尊像天蓋の左右に2軀	

		西南	宝冠如来坐像(面部後補) 左:腹前に置く 右:胸前に置く	蓮華座 八角框	菩薩立像 (面部後補) 左:腰/右:胸前	菩薩立像 (面部後補) 左:胸前/右:腰	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西	宝冠如来坐像(面部後補) 左:腹前に置く 右:胸前に置く	蓮華座 八角框	菩薩立像 (面部後補) 蓮蕾	菩薩立像 (面部後補) 蓮蕾	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西北	宝冠如来坐像(面部後補) 左:腹前に置く 右:胸前に置く	蓮華座 八角框	菩薩立像 (面部後補) 左:胸下/右:胸前	菩薩立像 (面部後補) 左:胸前/右:胸下	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		北	宝冠如来坐像(面部後補) 左:腹前に置く 右:胸前に置く	蓮華座 八角框	菩薩立像 (面部後補) 蓮華	菩薩立像 (面部後補) 蓮華	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		東北	宝冠如来坐像(面部後補) 左:腹前に置く 右:胸前に置く	蓮華座 八角框	菩薩立像 (面部後補) 左:腰/右:胸前	菩薩立像 (面部後補) 左:胸前/右:腰	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
⑩広済寺塔 八角十三層 57	錦州市 古塔区	東	如来坐像 左:腹前に置く 右:胸前で掌を伏せる	蓮華座 八角框	菩薩立像 胸前で 円形持物?	菩薩立像 蓮蕾?	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	・如来坐像を 龕内にあら わす。 ・各面に鏡を 計6枚填め る。
		東南	如来坐像 左:腹前に置く(手先欠) 右:胸前に置く	蓮華座 八角框	菩薩立像 (後補)	菩薩立像 (後補)	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		南	宝冠如来坐像 智拳印(右手上)	蓮華座 八角框	菩薩立像 宝蓋	菩薩立像 蓮華上に? (先端欠)	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西南	如来坐像 左:腹前に置く 右:胸前に置く	蓮華座 八角框	菩薩立像 (頭部後補) 蓮華	菩薩立像 (頭部後補) 華盤	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西	如来坐像 左:第1・4指を念じ腹前 右:胸前に置く	蓮華座 八角框	菩薩立像 数珠 or 索	菩薩立像 金剛杵	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西北	如来坐像 左:腹前に置く 右:胸前で掌を伏せる	蓮華座 八角框	菩薩立像 蓮華(下半 身後補)	菩薩立像 (後補)	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		北	如来坐像 左:腹前に置く 右:胸前に置く(後補)	蓮華座 八角框	菩薩立像 宝珠?	菩薩立像 水瓶?	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		東北	如来坐像 左:腹前に置く 右:胸前に置く	蓮華座 八角框	菩薩立像 胸前(右手・下半 身後補)	菩薩立像 (左肩一部以外後 補)	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
⑪遼陽白塔 八角十三層 71	遼陽市 白塔区 広祐寺	東	如来坐像(後補) 定印	蓮華座	菩薩立像 合掌	菩薩立像 合掌	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	・如来坐像を 龕内にあら わす。 ・各面に鏡を 計7枚填め る。
		東南	如来坐像(後補) 定印	蓮華座	菩薩立像 蓮蕾	菩薩立像 蓮華	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		南	如来坐像(後補) 定印	蓮華座	菩薩立像 水瓶	菩薩立像 華盤	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西南	如来坐像(後補) 定印	蓮華座	菩薩立像 華盤	菩薩立像 華盤	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西	如来坐像(後補) 定印	蓮華座	菩薩立像 蓮華	菩薩立像 左右・肩高に置く	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西北	如来坐像(後補) 定印	蓮華座	菩薩立像 合掌	菩薩立像 合掌	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		北	如来坐像(後補) 定印	蓮華座	菩薩立像 未敷蓮華	菩薩立像 華盤	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		東北	如来坐像(後補) 定印	蓮華座	菩薩立像 華盤	菩薩立像 華盤	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	

遼瀋塔 八角十三層 44	新門市 公主屯鎮	東	如来坐像 左:腹前に置く 右:胸前で掌を立てる	蓮華座	菩薩立像 左:腹前に置く 右:腹前に置く	菩薩立像 左:腹前に置く 右:胸前に置く	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	・如来坐像を 龕内にあら わす。
		東南	如来坐像 左:腹前に置く 右:胸前で掌を立てる	蓮華座	菩薩立像 左:腹前に置く 右:腹前に置く	菩薩立像 左・右:胸前で持 物を執るか?	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	※明らかに 近年補修さ れた如来坐 像は(後補) とした。た だし、如来 像および菩 薩立像の全 体的に表面 に補修がお よんでおり、 当初の彫刻 面の確認は 極めて困難 である。
		南	如来坐像(後補)	蓮華座	菩薩立像 華盤	菩薩立像 (摩滅)	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西南	如来坐像(後補)	蓮華座	菩薩立像 華盤	菩薩立像 華盤	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西	如来坐像 左:胸前で掌を水平にする 右:胸前で掌を立てる	蓮華座	菩薩立像 蓮華か? (持物先端欠)	菩薩立像 蓮華か? (持物先端欠)	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西北	如来坐像(後補) 定印	蓮華座	菩薩立像 合掌	菩薩立像 合掌	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		北	如来坐像 左:腹前に置く 右:胸前で掌を立てる	蓮華座	菩薩立像 左:胸前に置く 右:腹前に置く	菩薩立像 左:腹前に置く 右:胸前に置く	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		東北	如来坐像 左:腹前に置く 右:胸前に置く	蓮華座	菩薩立像 左:胸前に置く 右:腹前に置く	菩薩立像 左:腹前に置く 右:胸前に置く	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		無垢浄光舎 利塔 八角十三層 33	瀋陽市 皇姑区	東	如来坐像 「慈悲仏」の尊名あり	蓮華座	菩薩立像 合掌	菩薩立像 合掌	なし
東南	如来坐像 「阿閼仏」の尊名あり			蓮華座	比丘立像 合掌	比丘立像 合掌	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	・各面に鏡を 計3枚填め る。
南	如来坐像 「宝生仏」の尊名あり			蓮華座	菩薩立像 合掌	菩薩立像 合掌	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	※明らかに 近年補修さ れた如来坐 像は(後補) とした。た だし、他の 如来像およ び菩薩立像、 比丘立像に おいても、 全体的に表 面に補修の 際の漆喰が およんでお り、当初の 彫刻面の確 認は極めて 困難である。
西南	如来坐像(後補) 「等観仏」の尊名あり			蓮華座	比丘立像 合掌	比丘立像 合掌	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
西	如来坐像(後補) 「平等仏」の尊名あり			蓮華座	菩薩立像 合掌	菩薩立像 合掌	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
西北	如来坐像 「惠華仏」の尊名あり			蓮華座	比丘立像 合掌	比丘立像 合掌	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
北	如来坐像(後補) 「大慈仏」の尊名あり			蓮華座	菩薩立像 合掌	菩薩立像 合掌	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
東北	如来坐像 「普濟仏」の尊名あり			蓮華座	比丘立像 合掌	比丘立像 合掌	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
⑫東平房塔 六角九層 24	朝陽県 太平房鎮 東平房村	東北	如来坐像 左:拳を握り腹前に置く 右:施無畏印	蓮華座	菩薩立像 蓮蕾	菩薩立像 蓮蕾	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		東南	如来坐像 左:拳を握り胸前に置く 右手:触地印	蓮華座	菩薩立像	菩薩立像	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		南	如来坐像はあらわさない 龕を設ける		菩薩立像 蓮蕾	菩薩立像 合掌、蓮蕾を挟む	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西南	如来坐像 左:拳を握り腹前に置く 右:与願印	蓮華座	菩薩立像	菩薩立像	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		西北	如来坐像 左右:腹前で緊縛印	蓮華座	菩薩立像 蓮蕾	菩薩立像 蓮蕾	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	
		北	如来坐像はあらわさない 門扉を彫出		金剛力士立像	金剛力士立像	なし	中尊像天蓋の 左右に2軀	



図1-1 朝陽北塔



図1-2 同 西面 如来坐像（部分）



図1-3 同 西面 如来坐像



図1-4 同 東面 如来坐像



图1-5 同 第一層塔身 東面



图1-6 同 第一層塔身 南面



図1-7 同 第一層塔身 西面



図1-8 同 第一層塔身 北面



图2-1 雲接寺塔



图2-2 同 西面 如来坐像



图2-3 同 第一層塔身 西面



図2-4 同 第一層塔身 東面



図2-5 同 第一層塔身 南面



图3-1 大宝塔



图3-2 同 南面 如来坐像 (部分)



图3-3 同 南面 如来坐像



图3-4 同 北面 如来坐像



図3-5 同 第一層塔身 北面



図3-6 同 第一層塔身 西面



図4-1 青峰塔（修理の様子）



図4-2 同（修理前）



図4-3 同 第一層塔身 西面



図4-4 同 西面 右脇侍菩薩坐像



図4-5 同 西面 左脇侍菩薩坐像



図4-6 同 西面 如来坐像（部分）



図4-7 同 基壇 獅子



图5-1 八棱観塔



图5-2 同 東面 菩薩坐像



图5-3 同 第一層塔身 東面



図5-4 同 第一層塔身 東南面



図5-5 同 第一層塔身 東北面



图5-6 同 第一層塔身 西北面



图6-1 黄花灘塔



图6-2 同 東南面 如来立像



図6-3 同 第一層塔身 南面



図6-4 同 第一層塔身 西面



図7-1 塔萱子塔（修理の様子）



図7-2 同 第一層塔身 東面 如来坐像



図7-3 同 東面 左脇侍菩薩立像



図7-4 同 東面 右脇侍菩薩立像



図8-1 広勝寺塔（修理の様子）



図8-2 同

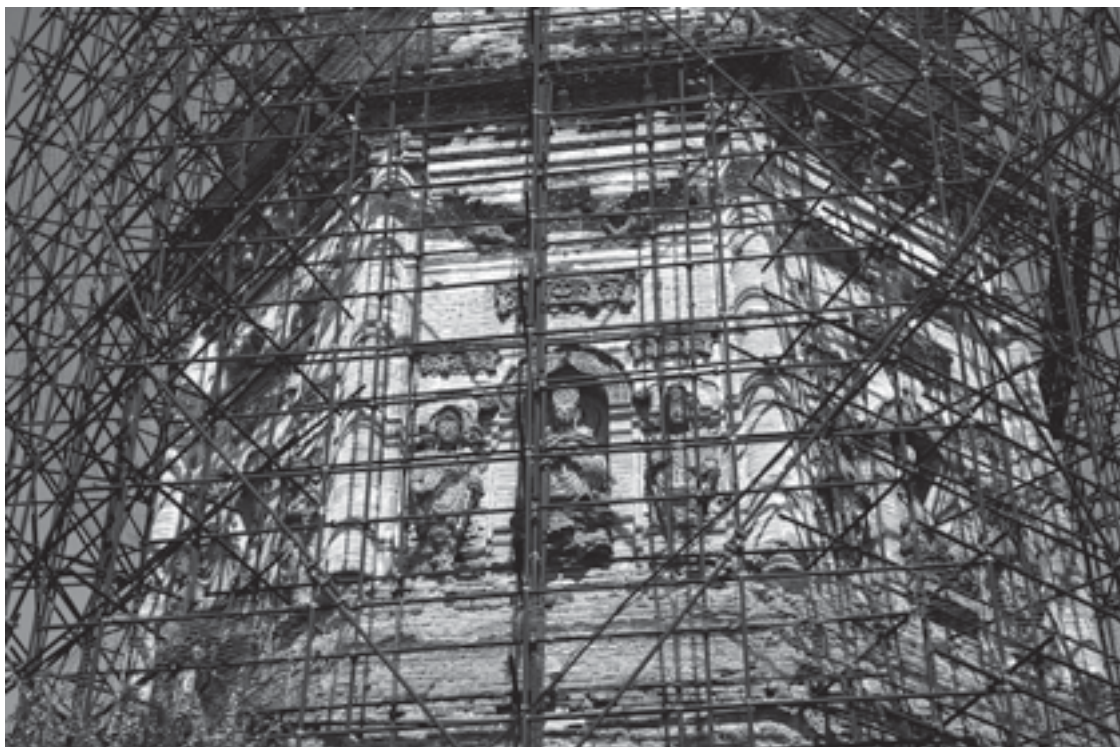


図8-3 同 第一層塔身 南面

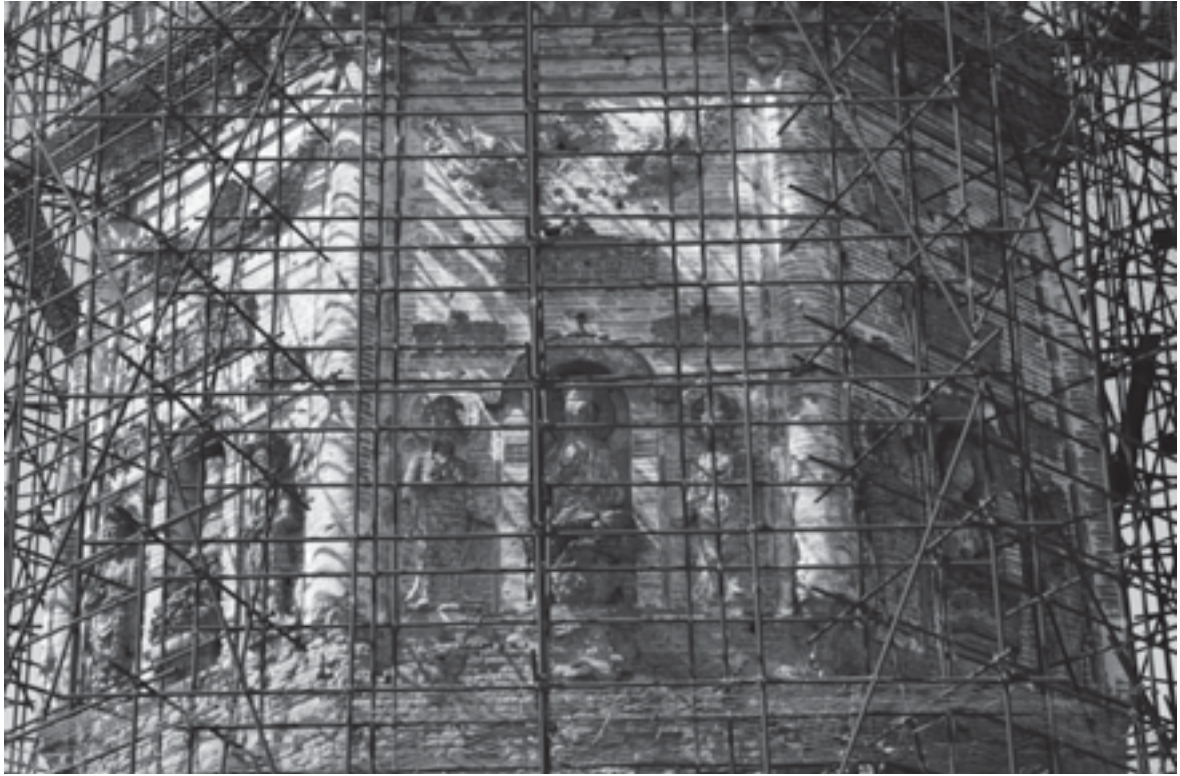


图8-4 同 第一層塔身 東面

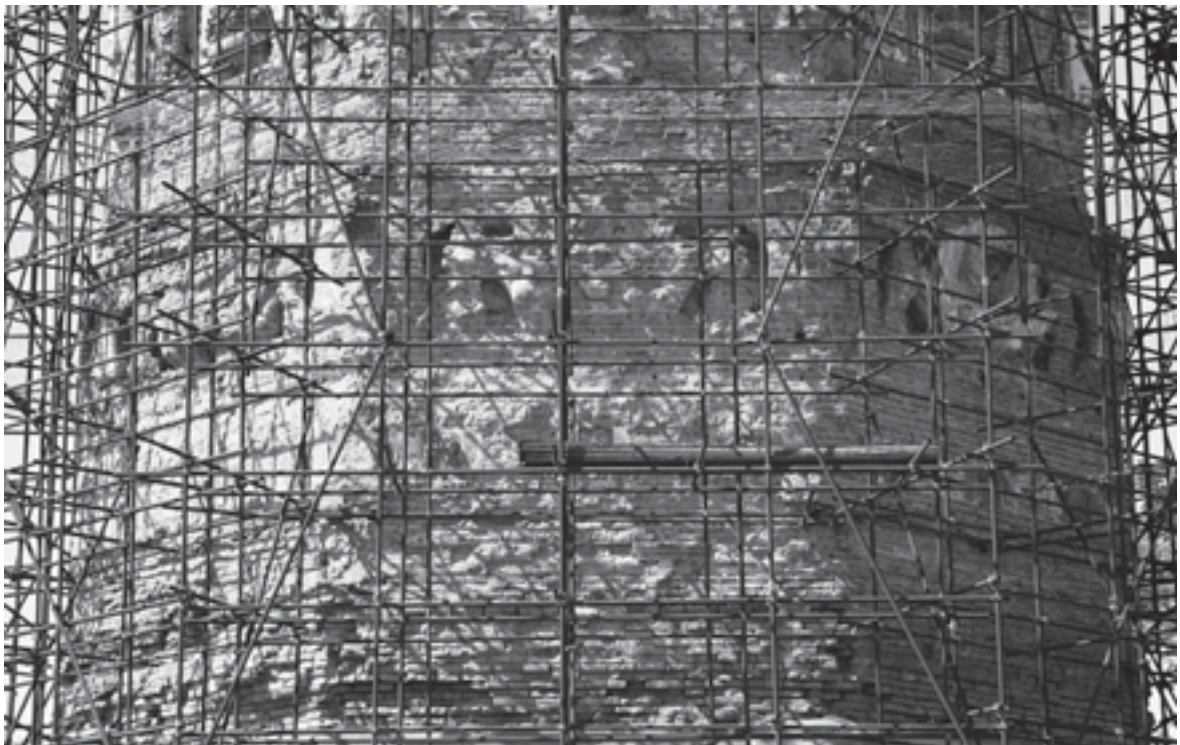


图8-5 同 上層基壇 東面



図9-1 崇興寺東塔

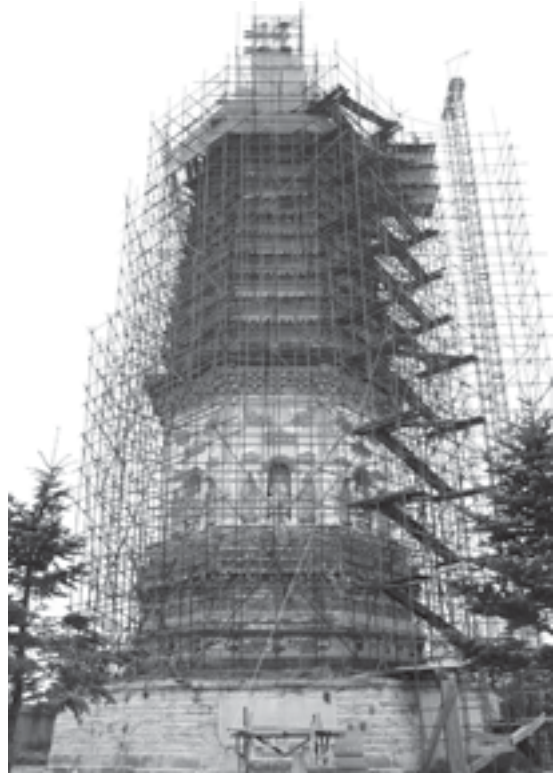


図9-2 崇興寺西塔（修理の様子）



図9-3 同 東塔 第一層塔身



图9-4 同 西塔 東北面
右脇時菩薩立像



图9-5 同 西塔 東北面
左脇侍菩薩立像



图9-6 同 西塔 東北面 如来坐像



図10-1 広濟寺塔



図10-2 同 南面 如来坐像



図10-3 同 第一層塔身 南面



图10-4 同 第一層塔身 西面



图10-5 同 東南面 如来坐像



图10-6 同 西面 如来坐像



図10-7 同 西面 右脇時菩薩立像



図10-8 同 西面 左脇侍菩薩立像



图11-1 遼陽白塔



图11-2 同 東南面 如来坐像



图11-3 同 第一層塔身 東面



図11-4 同 第一層塔身 東南面



図11-5 同 東南面 右脇時菩薩立像



図11-6 同 東南面 左脇侍菩薩立像

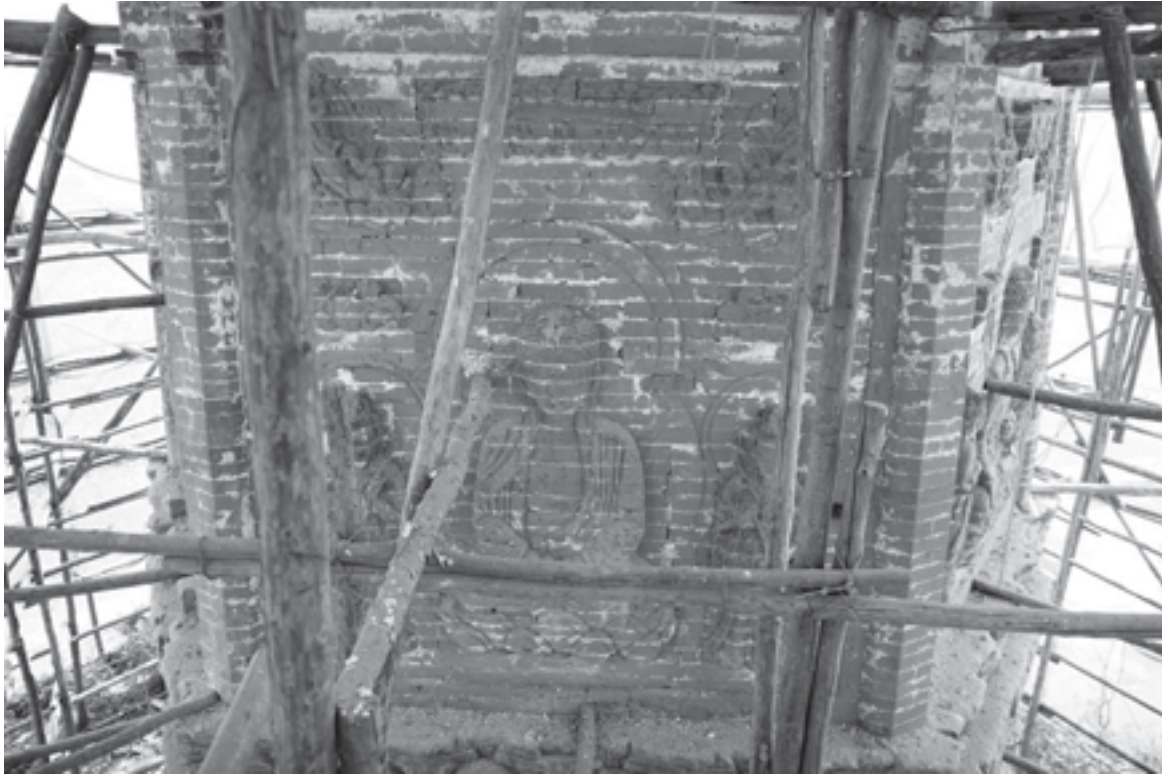


图12-1 東平房塔 第一層塔身 西北面



图12-2 同 第一層塔身 東南面



図12-3 同 (修理の様子)



図13 永豊塔



図14-1 朝陽北塔出土 金銀製経塔



図14-2 同 部分